

株式会社アドバンテスト

**2013年度 第3四半期
決算説明会**

2014年 1月28日

ご注意

- ◆ 当社は米国会計基準を採用しております。
- ◆ 将来の見通しに関する記述について
本プレゼンテーション資料およびアドバンテスト代表者が口頭にて提供する情報には、当社の現時点における期待、見積りおよび予測に基づく記述が含まれています。これらの将来の事象に係る記述は、当社における実際の財務状況や活動状況が、当該将来の事象に係る記述によって明示されているもの又は暗示されているものと重要な差異を生じるかもしれないという既知および未知のリスク、不確実性その他の要因が内包されています。

**2013年度 第3四半期
決算報告**

2014年 1月28日
取締役 兼 常務執行役員 中村 弘志

業績概要

ADVANTEST®

(単位: 億円)

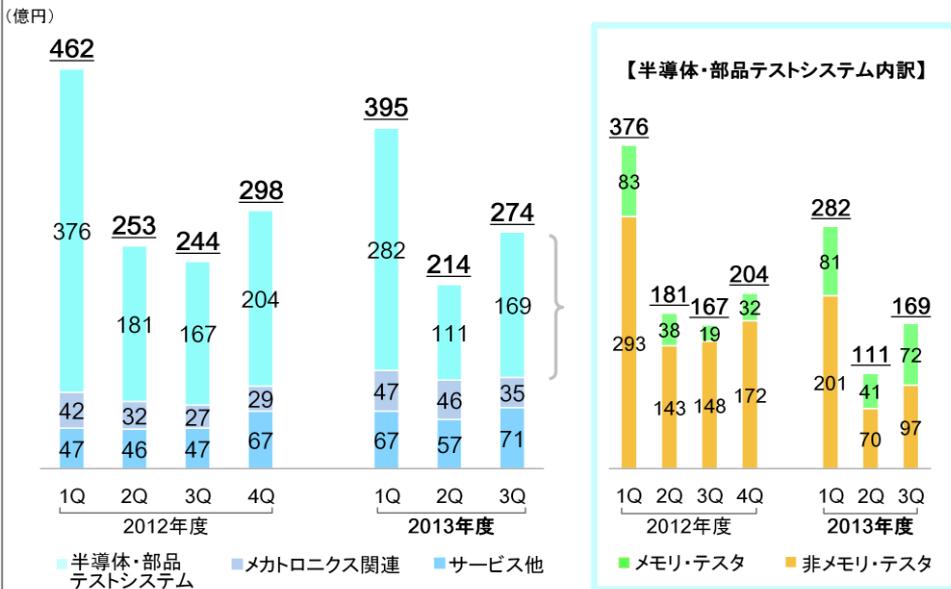
	2012年度				2013年度				
	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	実績	3Q	
								前期比 (%)	前年同期比 (%)
受注高	462	253	244	298	395	214	274	28.2	12.6
売上高	334	392	246	357	301	295	197	-33.6	-20.4
売上原価	158	187	116	179	148	160	152	-5.5	30.9
売上総利益	176	205	130	178	153	135	45	-66.8	-65.6
営業利益	8	26	-26	-7	-33	-47	-264	-	-
営業外収支	5	-8	-4	-7	5	1	-5	-	-
税引前純利益	13	18	-30	-14	-28	-46	-269	-	-
当期純利益	4	11	-34	-19	-36	-57	-248	-	-
受注残	364	225	223	164	258	177	255	44.3	14.6

○ 2013年度第3四半期の業績概要

- 受注高 274億円 前期比 28%増
- 売上高 197億円 前期比 34%減
- 営業損失 264億円
- 税引前純損失 269億円
- 当期純損失 248億円
- 受注残 9月末から 78億円増加 255億円
- 棚卸資産の評価損と長期性資産の減損を計上
- 受注高と売上高の増減、および今回の損失計上の詳細を、後段で説明

受注高 事業セグメント別

ADVANTEST®



5

All Rights Reserved - Advantest Corporation

2014/ 1/28

○ 2013年度第3四半期の事業セグメント別受注高

○ 半導体・部品テストシステム事業

- ・前期比53%増 169億円
- うち非メモリ・テスタ 97億円
- メモリ・テスタ 72億円

・非メモリ・テスタは、スマートフォン用の半導体向けなどで需要が回復

・メモリ・テスタは、DRAM前工程向けで増加

○ メカトロニクス事業

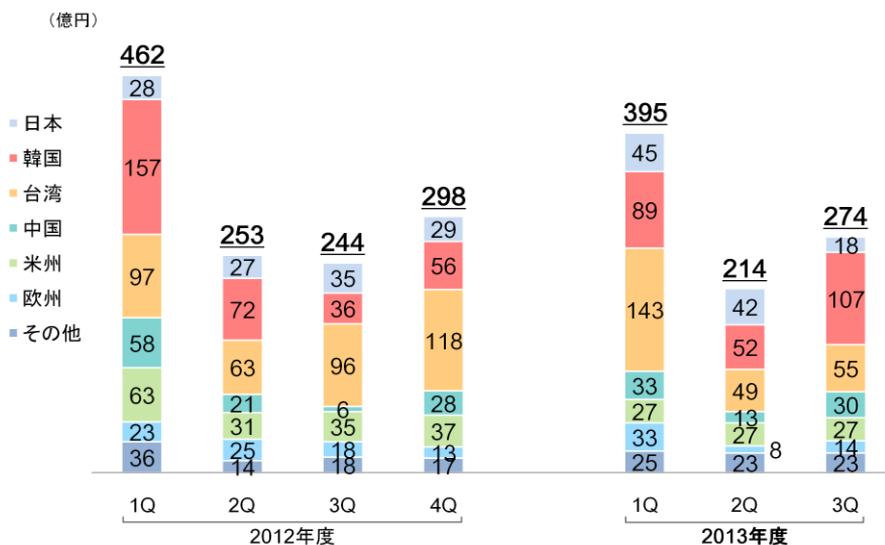
- ・前期比25%減 35億円
- EB露光装置受注の減少

○ サービスその他事業

- ・前期比24%増 71億円
- 今年度から強化している収益向上の取り組みを反映

受注高 地域(出荷先)別

ADVANTEST®

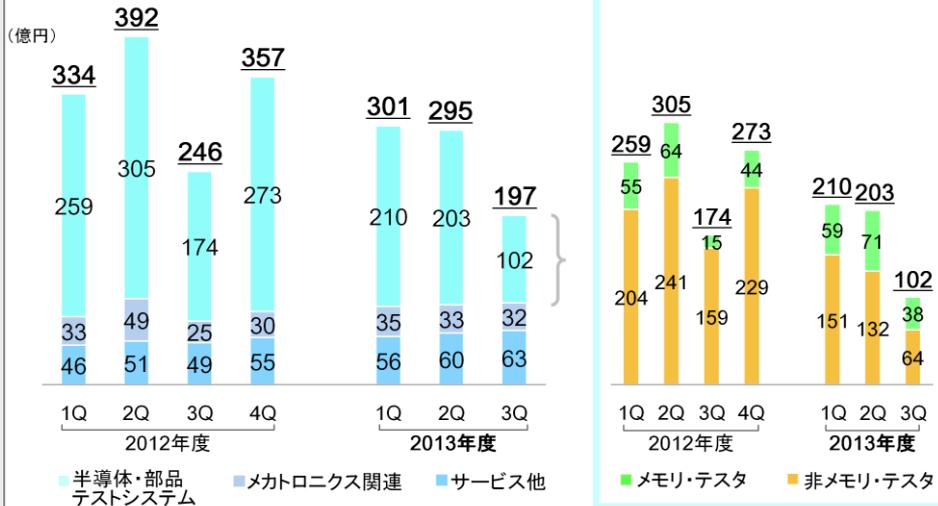


○ 2013年度第3四半期の地域別受注高

- 韓国
第2四半期に一旦落ち込んだDRAM関連投資が、再び増加
- 中国
LCDドライバIC用テストの需要が増加
- 日本
EB露光装置の受注減

売上高 事業セグメント別

ADVANTEST®



7

All Rights Reserved - Advantest Corporation

2014/ 1/28

○ 2013年度第3四半期の事業セグメント別売上高

○ 半導体・部品テストシステム事業

・前期比	50%減	102億円
うち非メモリ・テスト		64億円
メモリ・テスト		38億円

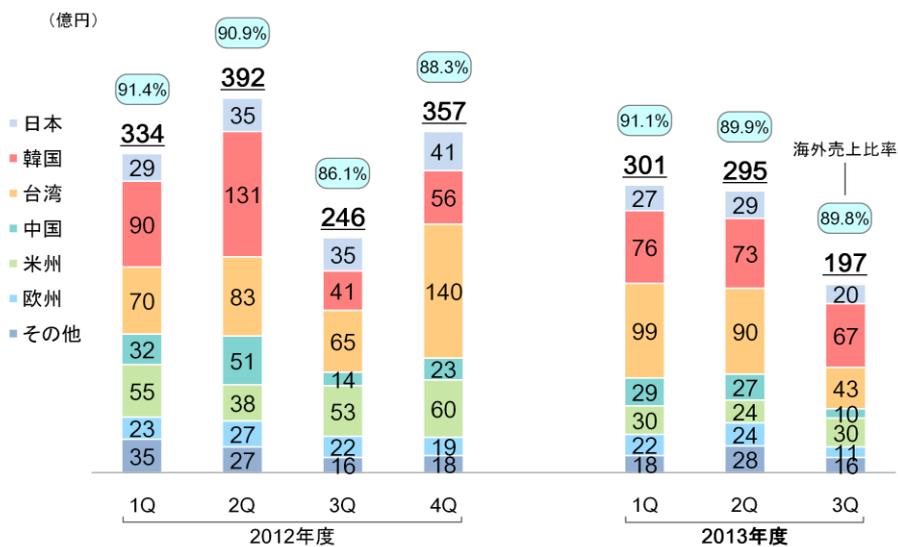
・第2四半期の低調な受注を反映

・非メモリ・テストは、LCDドライバIC用や
ハイエンド・ロジックIC向けが減少

・メモリ・テストは、DRAM後工程向けなどが減少

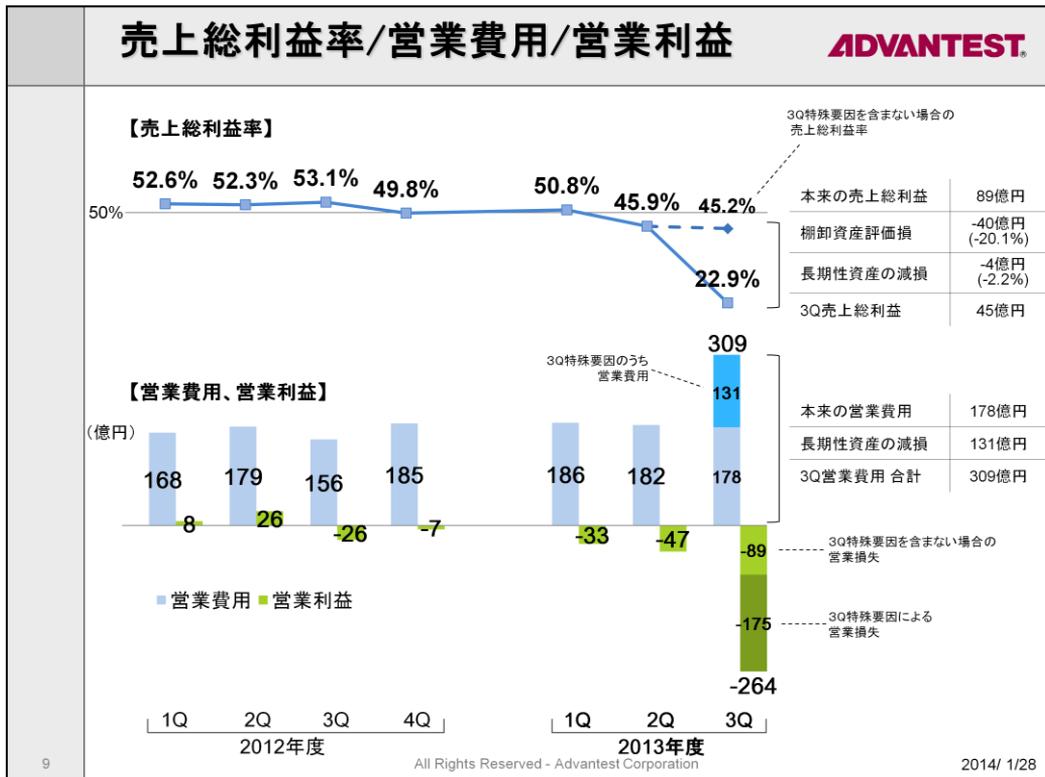
売上高 地域(出荷先)別

ADVANTEST®



○ 2013年度第3四半期の地域別売上高

- 台湾
主にLCDドライバIC向けが減少
- それ以外の地域も全体に軟調



○ 2013年度第3四半期の営業利益について

- 売上総利益率 前期比23.0ポイント減 22.9%
前期から大きく低下したが、当第3四半期に

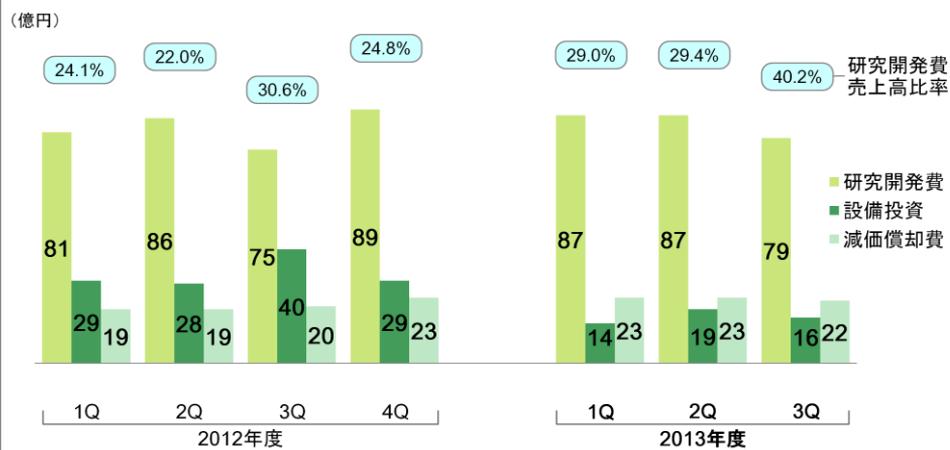
棚卸資産評価損 40億円
長期性資産の減損 4億円

など 計44億円を売上原価に計上したため

- それらの要因を除いての売上総利益は 89億円、売上総利益率は 45.2%
- 営業費用 309億円
こちらにも長期性資産の減損 131億円を含む
それを除いた場合の営業費用は178億円
- 以上の結果、営業損失 264億円
うち、175億円がこの第3四半期に計上した特殊要因によるもの
この特殊要因が無かったと仮定すると、営業損失 89億円

研究開発費/設備投資/減価償却費

ADVANTEST®

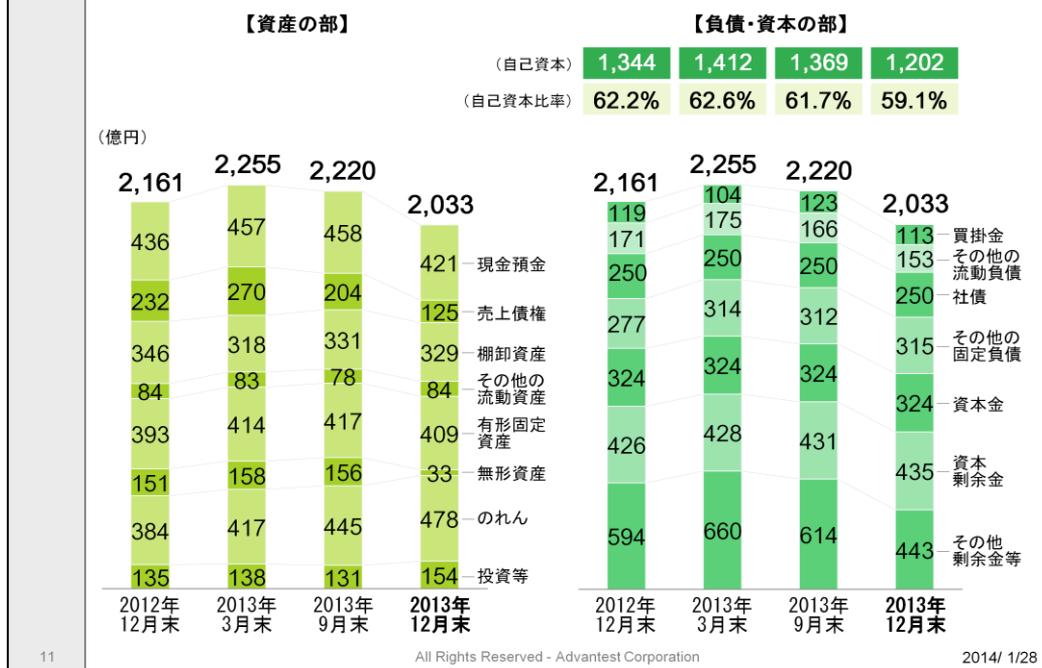


○ 2013年度第3四半期の営業費用の内訳

- 研究開発費 79億円
- 設備投資 16億円
- 減価償却費 22億円

バランス・シート

ADVANTEST



○ 2013年12月末時点のバランス・シート

○ 資産の部

・売上債権

2013年9月末比 79億円減 125億円

・無形資産

当第3四半期での減損に伴い

2013年9月末比 123億円減 33億円

・総資産

2013年9月末比 187億円減 2,033億円

○ 負債・資本の部

・自己資本

2013年9月末比 167億円減 1,202億円

・自己資本比率は

2013年9月末から 2.6ポイント減 59.1%

2013年度業績予想 および
当社の方向性について

“BEP1,200億円へ”

2014年 1月28日

代表取締役 兼 執行役員社長 松野 晴夫

2013年度 業績予想(通期)

ADVANTEST

	(単位: 億円)		(9月25日発表値)		
	2012年度 実績	2013年度 前回予想(A)	2013年度 今回予想(B)	対前回予想比 (A-B)	対前年度比
受注高	1,257	1,485	1,200	-285	-57
売上高	1,329	1,430	1,100	-330	-229
営業利益	1	0	-360	-360	-361
当期純利益	-38	-25	-359	-334	-321

※本日1月28日に発表した業績予想の第4四半期の為替前提: 1米ドル=105円、1ユーロ=140円
9月25日に発表した前回予想の為替前提: 1米ドル=98円、1ユーロ=129円

・ 厳しい事業環境を踏まえ、通期予想を下方修正

○ 2013年度の業績予想について

- ・ もともと今期はテスト市場の縮小を予想していたが、
上期にスマートフォン関連需要が予想以上に軟調な動きとなり
非メモリ・テストの需要が減少
それを受け、業績予想を9月25日に修正
- ・ その後、事業環境は下期から回復しているが、そのペースが期待ほど
伸びていないことで今年度の業績予想を再度見直し

○ 改めた業績予想値は次のとおり

- ・ 受注高 1,200億円
- ・ 売上高 1,100億円
- ・ 営業損失 360億円
- ・ 当期純損失 359億円

- ・ 第4四半期為替レートは、
1米ドル=105円、1ユーロ=140円を前提とした

2013年度 業績予想(第4四半期)

ADVANTEST®

(単位: 億円)

下段カッコ内は前年同期比

	2012年度			2013年度		
	1Q-3Q	4Q	通期	1Q-3Q	4Q予想	通期予想
受注高	959	298	1,257	883 (-7.8%)	317 (6.0%)	1,200 (-4.6%)
売上高	972	357	1,329	793 (-18.5%)	307 (-13.9%)	1,100 (-17.2%)
営業利益	8	-7	1	-344 (-)	-16 (-)	-360 (-)
当期純利益	-19	-19	-38	-341 (-)	-18 (-)	-359 (-)

○ 第4四半期の業績予想

- 足元のテスト市場の回復ペースを踏まえた第4四半期の業績予想は以下の通り

受注高	317億円
売上高	307億円
営業損失	16億円
当期純損失	18億円

- 受注高、売上高とも第3四半期から伸びると予想しているものの、全体的にはまだ厳しい状況から抜け出せていない
- 下期より取り組んでいる経費節減の効果で、当上期実績より損失幅改善

収益を安定的に生み出すための 2つの構造転換

経営課題

✓ コスト上昇で
収益性悪化



解決に向けて

コスト構造の転換
**BEP1,200億円への
スリム化を2014年度実現**

✓ テスタ市場の
成熟化



事業構造の転換
**メカトロニクス、サービス、
新規事業の収益拡大実現**
(経営資源の成長分野へのシフト)

○ ここからは、当社の今後の方向性について

- 当社が抱える課題は2つ
- 1つは、円安進行に伴うコスト増加による収益性の悪化
- もう1つは、事業の中心であるテスタ市場にここ数年間大きな市場成長がなく、売上高を伸ばせていない点
- テスタ市場成熟化の対策として、既にこの2年間、テスタ周辺事業の強化と、新規事業の育成に取り組んでいる
- 本日は、この下期から推進している、コスト構造の転換と来年度の見通しについて、説明する

コスト削減 約125億円
売上高損益分岐点: 1,430億円 → 1,200億円

＜主な要因＞

- | | |
|---|---------------------------|
| <p>(1) 人件費適正化</p> <ul style="list-style-type: none"> - 補充採用凍結による人員自然減 - 不況期の賞与極小化 - 残業抑制 | <p>年間効果額 約70億円</p> |
| <p>(2) オペレーション費用削減</p> <ul style="list-style-type: none"> - 基幹情報システム統合 - 事業所統廃合 ＜群馬第2工場および仙台研究所の一部、一部関係会社施設を閉鎖＞ | <p>年間効果額 約10億円</p> |
| <p>(3) 減価償却費の減少</p> | <p>年間効果額 約20億円</p> |
| <p>(4) 売上総利益の改善</p> | <p>年間効果額 約25億円</p> |

○ コスト構造改善について

- 2013年度上期末時点のBEPは約1,430億円
- コスト構造改善のため、人件費の適正化を実施
 欠員の補充採用抑制による人員減、不況期における賞与の極小化、残業抑制を通じて、年間約70億円のコスト削減効果を見込む
- オペレーション費用面では、年間約10億円のコスト削減
 IBVerigy社との最後の統合作業となる情報システム統合完了により4月よりその関連費用を削減できるほか、事業所統廃合による経費減を見込む
- この第3四半期に長期性資産の減損費用を計上したが、その影響で減価償却費が来期以降年間約20億円軽減される見通し
- すでにスタートしている施策もあり、2014年度上期の段階で、これら固定費削減効果の大半を実現できると考えている
- 売上総利益についても、製品ポートフォリオ見直しなどで年間約25億円の改善を目指す
- これらによって、2013年度上期末のBEP約1,430億円体制からBEP1,200億円体制へ移行する

- これまでの2014年度売上高目標は2,500億円
- その後のマクロ経済の低迷、最終製品市場の変化、技術動向の変化を受け、テスト市場の成長率は当初の期待より低く推移
- テスタ関連市場も同期して伸び悩み目標の達成が難しくなった

2014年度の売上高・営業利益率

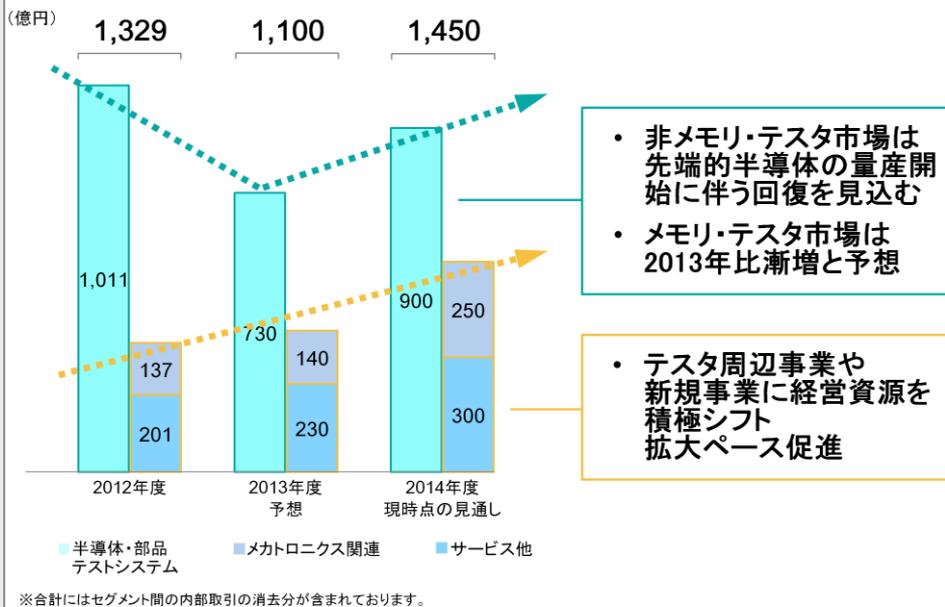
	<目標値>	<現時点の見方>
・ 売上高	2,500億円	1,450億円
・ 営業利益率	20%以上	7%

○ 2014年度の売上高と営業利益率の見通しについて

- アドバンテスト・グループの全社運動を展開しているなかで売上高2,500億円を目標として掲げ、その達成に向け取り組んできた
- その目標設定後、パソコン市場の縮小などの影響を受けテスト市場は期待していたようには成長せず、逆に市場縮小に遭遇
- 今後も成長に向けた取り組みを継続するが、2014年度の目標値の達成が難しくなっている
- 足元の業界動向や市場の手応えから、2014年度については
 売上高 1,450億円
 営業利益率 7%

が現時点での見方

2014年度売上高 現時点の見通し **ADVANTEST**



18

All Rights Reserved - Advantest Corporation

2014/ 1/28

○ 2014年度売上高 現時点の見通し

- 2013年は大きく市場が縮小したが、2014年は市場回復の年
先端的半導体の量産が相次ぐことで、非メモリ・テスト市場が回復すると見込んでいる
- メモリ・テスト市場の規模も、漸増するとみている
- 非メモリ・テストもメモリ・テストも市場が伸びることで、
2014年度のテスト売上は約900億円と想定
- メカトロニクス、サービス他の事業セグメントについては、
これらテスト以外の事業を伸ばすことが、
全社収益の安定化、および今後の成長ドライバーであると位置付けている
- ここ2年間、メカトロニクス、サービス他の増収のための取り組みを
さまざま進めており、徐々に実りつつある
テスト市場の変動に左右されない、安定した事業構造への転換を加速する
ため、経営資源を積極的に投入していく

■ メモリ・テスト事業

- DRAM高速化による堅調な先行き期待
- NANDフラッシュ・テストはSSDやモバイル機器に搭載される高機能品向け中心に需要拡大を見込む



NANDフラッシュ・メモリ用
メモリ・テスト・システム「T5831」

■ 非メモリ・テスト事業

- パソコン販売軟化、スマートフォン市場成長鈍化の影響が続いたが、春先より市場本格回復の見通し
- 引き続きMCU、CIS、PMICのシェア拡大に取り組む

○ 最後に、各事業の今後の見通しについて

○ メモリ・テスト事業

- 2013年に引き続き、今後も堅調なテスト需要を期待
DRAM向けテストは、2013年は前工程用の需要が伸びたが
2014年は次世代規格品の登場に対応した後工程用テスト需要が
中心となると予想
- NANDフラッシュ用テストは、SSDやモバイル機器に搭載される
高機能品向けの需要が拡大すると期待
新製品の拡販に努める

○ 非メモリ・テスト事業

- 昨夏の落ち込みからの回復途上にあるが、パソコンや
ハイエンド・スマートフォンなど、テスト需要喚起役となる最終製品の
動向に力強さを欠いている影響を受けている
- 現在のところ、4月から夏場にかけてのテスト需要本格化を想定
- 主力のハイエンド・ロジックIC向けでは、大手半導体メーカーで
相次いで先端投資が進むことに連動した、テスト需要拡大に期待
- また、当社のテストは、量産性、経済性に優れる
MCU、CIS、PMICなどその強みを活かせる分野で
シェアを伸ばす

■ メカトロニクス関連

- EB露光新製品、SEM新製品の採用拡大に注力
- 半導体の技術トレンドに即したハンドラ新製品の需要拡大を見込む

SoC・テスト・ハンドラ 新製品「M4871」



■ サービス、新規事業関連

- これまでの強化策が実りつつあるサービス収入の継続的な伸びを見込む
- ワイヤレス・テスト事業、SSDテスト事業、テラヘルツ波製品事業などが徐々に実績拡大できる見通し

○ メカトロニクス関連事業

- 電子ビーム技術を応用するナノテクノロジー製品に対する当社製品への関心が高まってきた
EB露光装置とCDSEMを両軸に、当社技術の認知度向上と受注実績を着実に伸ばしていく計画
- テスト・ハンドラ新製品「M4871」は狭ピッチ化が進むモバイル用半導体向けを中心に期待がもてる

○ サービス、新規事業関連

- 2013年度から本格的スタートさせたサービス収益拡大策は着実に成果を出している
- さまざま種を蒔いている新規事業では、ワイヤレス・テスト事業やSSDテスト事業など、システム・レベル・テスト領域での取り組みに最も手応え、テラヘルツ波関連事業も裾野が広がってきた
これらが徐々に業績に貢献してくることを見込んでいる